

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	上 山 伸 幸
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>方法知のメタ認知を促す話し合い学習指導の研究—小学校国語科を中心として—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 山 元 隆 春</p> <p>審査委員 教授 田 中 宏 幸</p> <p>審査委員 教授 間 瀬 茂 夫</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、小学校国語科における話し合い学習指導を対象とし、その研究史と近年の理論と実践の動向を踏まえながら、方法知のメタ認知を促す話し合い学習指導の有効性・意義を明らかにし、学習内容の類型化・指導法の検討・教材の開発という三つの側面から、新たな話し合い学習指導論の構築を目指したものである。</p> <p>本論文は、序章（研究の目的と方法）、第1章（話し合い学習指導研究の成果と課題）、第2章（方法知のメタ認知を促す話し合い学習指導の構想）、第3章（方法知のメタ認知を促す指導方法の検証）、第4章（方法知のメタ認知を促す指導方法の活用可能性）、第5章（方法知のメタ認知を促す話し合い学習指導論の構築）、終章（研究の総括と展望）から構成されている。</p> <p>序章には、話し合い学習指導を研究の対象とする目的と研究方法が述べられている。</p> <p>第1章では、話し合い学習指導の研究史を概観し、近年の研究動向と先行研究の成果を明らかにしている。今日までに我が国の話し合い学習指導の理論と実践の両面にわたる周到な検討がなされた上で、近年に至ってメタ認知を重視した指導方法の開拓が行われながらも、学習者にメタ認知させる内容についての研究や、話し合いを対象化する指導法の体系化を行う研究が不十分であるという指摘がなされている。</p> <p>第2章では、ライルやシェフラーらの文献に依拠しながら「方法知」の定義づけが行われ、学習内容としての話し合いの方法知の類型化がなされている。メタ認知研究の知見を援用しながら、メタ認知的モニタリングとメタ認知的経験を手がかりとして、話し合い学習指導構想のための枠組みを論じ、指導方法として学習者が話し合いを対象化する活動の重要性が詳細に掘り下げられている。その上で、話し合い学習での方法知の有効性を自覚するためのデバイスとして「全体凝縮型文字化資料」の理念とその有効性について論じた。</p> <p>第3章では、第2章の考察を踏まえ、方法知のメタ認知を促すことに焦点を当てた授業実践の分析にもとづいて、方法知のメタ認知を促すことの有効性が論じられている。方法知が有効であることを学習者が自覚する際の認知過程を検討した上で、第2章で提案された「全体凝縮型文字化資料」を用いながら、独自に構想し実行した、小学校4年生での実験授業を、量的・質的に分析・検討した。その結果、「全体凝縮型文字化資料」を教材とし、</p>			

学習者に話し合いについての方法知を発見させた後に、方法知自覚化の認知過程を発動させる学習活動を設けることが有効であることが明らかになった。これらの知見をもとにしながら、方法知の自覚化を促す授業過程と教材の効果についての検討を行った。その検討内容を踏まえて独自に構想し実行した方法知の活用を促す授業の分析を行い、メタ認知的経験としての「困難点」に焦点化した学習指導の重要性を指摘した。

第4章では、第3章で検討しその有効性を確認した「全体凝縮型文字化資料」を教材とする指導方法の活用可能性が考察されている。文字化資料を用いた指導方法の課題を検討した上で、独自に計画し実行した文字化資料を用いた授業の分析にもとづいて、実践学習者が作成する文字化資料によって計画的な話し合い学習が推進される条件について考察がなされている。考察の結果として、計画的な話し合い学習に対する文字化資料の活用が有効であり、学習者が方法知を内面化する教材としての文字化資料の意義が明らかになった。

第5章では、前章までの研究成果を統合しつつ、方法知のメタ認知を促す話し合い学習指導論の構築が行われている。方法知のメタ認知を促す話し合い学習指導論の構造が掘り下げられ、教材・指導方法・学習内容のそれぞれの構成要素や、それらの要素間の関係について詳述され、方法知のメタ認知を促す話し合い学習指導論の体系が明示されている。

終章では、第1節で本研究の総括を行い、成果と結論が述べられ、第2節に今後の研究の課題と展望が示されている。

本論文は、従来の国語科教育研究において未開拓であった、話し合い学習指導における、話し合いに関する学習者の方法知の自覚化という問題に正面から取り組み、小学校の教育現場での実践・実証的研究を取り入れながら、話し合い学習指導を推進するための知見を少なからず示し、一方で、話し合い学習指導実践の指針となりうる学習指導理論（モデル）を提案したものである。とくに次のような点に本論文の意義と特色を認めることができる。

（1）従来の国語科話し合い学習指導の理論と実践に関する文献を幅広く渉猟し、話し合い学習指導を推進するための拠点を、学習者の話し合いに関する方法知のメタ認知を促すことに求め、この問題を、理論面から掘り下げるだけでなく、学習内容・指導方法・教材の各方面にわたって考察し、先行する理論と実践を乗り越える成果を示した。それだけでなく、三度にわたって小学校の教育現場で方法知のメタ認知を促す話し合いの実験授業を計画・実践し、その分析考察を踏まえた提言を行っている。

（2）理論と実践の両面にわたる研究成果を踏まえて、方法知のメタ認知を促す話し合い学習指導の構造と体系を明らかにし、学習者の話し合い能力・話し合い学習能力を高める理論（モデル）を導くことができたことは、今後の国語科話し合い学習指導の展開に大きな貢献をもたらすものと考えられる。本研究で開発された理論（モデル）では学習内容・指導方法・教材の相互関連性が強調されているが、これは、話し合い学習指導実践において各要素の相互関連性を意識することによって、話し合い学習の成果が高まることも示唆している。従来の話し合い学習指導論で不十分であった問題を克服するための重要な提案を含んだものであると判断することができる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年2月16日

